



動物レスキュー通信

2018年5月 第60号 (平成30年5月1日発行)

発行元
一般財団法人 国連世界動物救済支援機構 詩月財団

詩月(しづく)：詩月財団 理事長
愛玩動物飼養管理士 一級
ペット災害危機管理士 三級
お問い合わせ : sizuku.foundation@gmail.com

犬猫の高齢化 最期まで犬らしく、猫らしく

現在の日本は超高齢社会と言われています。WHO(世界保健機構)が定める定義では全人口のうち高齢者(65歳以上)の割合が7%を超えると「高齢化社会」、次に14%を超えると「高齢社会」、そして遂に21%を超えると「超高齢社会」としています。平成29年9月の敬老の日に総務省が発表した統計では日本の総人口が21万人減少する一方で、高齢者の数は57万人増加しました。総人口に占める高齢者の割合は27.7%となり、過去最高を記録。90歳以上の人口が初めて200万人を超えたトヨード協会が発表した2017年の平均寿命は犬が14.19歳、猫が15.33歳となっています。人間の65歳をワンちゃん、ネコちゃんの年齢に換算してみると12歳13歳と考える事が出来るので、この結果を見るとワンちゃん、ネコちゃんも高齢化社会に入りてしまっていると言えます。1980年の平均寿命は犬で37歳、猫では30歳でした。その後徐々に伸び続け、犬は1999年に、ネコは2006年に14歳に達しました。昔の大猫が極端に短命だったのかと、どうそういう訳ではなく、長生きする大猫はいましたが、その一方で子犬や子猫の頃に感染症で亡くなってしまったり、今は予防ができるフィラリア症などで落としてしまつ命も多くありました。猫においては今では完全室内飼育が主流ですが、当時は外出可能な猫が多くいたため交通事故や感染症などで命を落とすケースも多くありました。ワクチンや駆虫薬が普及した事、獣医療が発展し治療できる病

事が増え、早期発見も可能になつた事、飼い主が積極的に獣医と関わるようになつた事、去勢・避妊手術が普及した事、ペットフードなどの普及により栄養状態が向上し安定した事、犬猫と飼い主との関わり方がペットというよりは家族の一員という意識が高まり、健康管理などをしっかりするようになった事などが、平均寿命が大きく延びた要因だとられます。

介護を予防しよう

このように犬猫の寿命が延びる事によつて、人間社会で起つてゐる事と同じ問題が起きています。それは介護の問題。様々な介護グッズや介護施設などが登場し、雑誌やテレビなどでも介護の大変さがクローゼアップされるようになつてきました。だからといって全てのワンちゃん、ネコちゃんに介護が必要になるわけではありません。早期発見・早期治療や最適なケアをしてあげる事でワンちゃん、ネコちゃんがきちんと大らしく、猫らしく生きられるようになれる事ができます。人の場合もそうですが、命はあるものの寝たきりになつてしまふ事で、その人生は元気な時よりは楽しくないものになつてしましますし、自立しているとは言えない状況になつてしまつます。その為に運動や食事に気をつけて、出来るだけ元気で動けるように今では健康新生活をいかに延ばすかに注目が集まつていますが、同じようにワンちゃん、ネコちゃんも最期まで犬らしく、そして猫らしく自立



して生きていらるる時間を長くしてあげられるように手助けしてあげる事が最も重要な事です。犬らしく、猫らしくとは自分で食事ができる、自分で歩く事が出来る、自分で排泄できる自分で飼い主さんとの「ミニユーケーション」が取れるなど、生理的にも心理的にも自立できている状態だと思ひます。その為に高齢犬、高齢猫がいる家庭では、高齢化による病気や食欲が落ちるのは加齢が原因ではなく、病気が原因の場合もあります。普段と何が違うと感じた時はすぐに獣医さんに覗いてもらつて下さい。あとは入浴にも気をつけ、あげて下さい。若い頃は頻繁に入浴させていたワンちゃん、ネコちゃんも、高齢になると入浴自体が体力を奪いますので回数を減らしたり、入浴で拭き取つてあげる方法に変更するなど、出来るだけ負担がかからない方法に変更してあげる事が大切です。又、ネコちゃんの場合は自分でするグルーミングの回数が減ります。以前よりも毛艶が悪くなつてきました。このように大らしく、猫らしく生活できるように考えてあげる事が人と動物との関係が良好に保て、不幸な動物が減ると信じてこれからも活動してまいります。